



Adaptation and communication in Japan : foreigners' adaptation to Japanese cultural environment and communication with strangers

著者	Patricia Monica Duronto
内容記述	Thesis (Doctor of Arts)--University of Tsukuba, (A), no. 3832, 2005.3.25 Includes bibliographical references
発行年	2005
URL	http://hdl.handle.net/2241/2454

氏 名（国籍）	パトリシア モニカ ドロント（アルゼンチン）	
学 位 の 種 類	博 士（学 術）	
学 位 記 番 号	博 甲 第 3832 号	
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
審 査 研 究 科	図書館情報メディア研究科	
学位論文題目	ADAPTATION AND COMMUNICATION IN JAPAN : FOREIGNERS' ADAPTATION TO JAPANESE CULTURAL ENVIRONMENT AND COMMUNICATION WITH STRANGERS （日本における適応とコミュニケーション：日本文化環境への外国人の適応とストレンジャーに対する日本人のコミュニケーション）	
主 査	筑波大学教授	中 山 伸 一
副 査	筑波大学教授	石 井 啓 豊
副 査	筑波大学教授	溝 上 智恵子
副 査	日本大学教授	西 田 司
副 査	獨協大学教授	石 井 敏

論 文 の 内 容 の 要 旨

著者は、外国人留学生としての日本における適応経験から、日本人のコミュニケーションの特異性を直感的に感じ、日本人のコミュニケーションの特徴を明らかにしようという動機を持った。本論文においては日本人が行う初対面の人（以下ストレンジャーと呼ぶ）とのコミュニケーションに注目し、ストレンジャーの文化背景とコミュニケーションが行われる文化環境による違いを、新たなコミュニケーション研究に対する視点を加えつつ明らかにしている。

論文は大きく 3 部から構成されている。

第 1 部では、外国人の日本に対する社会的・心理的適応に関する検討について述べられている。

筆者は、ラテンアメリカからの外国人留学生に対して、社会適応テストや異文化適応テスト、さらにインタビューを行い、外国人留学生が日本社会に適応するには社会的にも心理的にも適応する必要がある、その際コミュニケーションが重要な要因となる事を明らかにした。そして、日本人が同文化の人とのコミュニケーションと異文化の人とのコミュニケーションに、差異を持っている事を指摘した。

第 2 部では、このような違いを明らかにするコミュニケーションの研究方法についての検討が述べられている。

著者はまず、Gudykunst の「不安性・不確実性調整（AUM）理論」に基づき、感情（不安性）と認知（不確実性）に加えて、行動（回避性）をコミュニケーション研究に取り入れ、総合的な視点で検討すべきであることを提案した。そして回避性について検討した結果、回避性はコミュニケーションを始める前と始めた後に区分できる事を示し、それぞれの度合いを求める質問を作成した。

その質問を、既存の不安性と不確実性を調べる質問と合わせて、日本人学生に同文化のストレンジャーに対した時の記憶をもとに回答してもらい、それらの関係を検討した。筆者は不安性・不確実性・回避性はそれぞれ正の相関を持ち、回避性は不安性と不確実性の関数であるという仮説をたてた。調査結果を分析した

結果、不安性と不確実性の相関関係を除いて、これらの仮説は支持された。

この結果から筆者は、回避性の特性が明らかになり、コミュニケーションを研究する上の一つの視点として回避性を用いる事が有効である事を主張した。

第3部では、ストレンジャーの文化的背景の違いとコミュニケーションを行う文化環境の違いという面から、日本人のコミュニケーションに関する検討について述べられている。

筆者は日本人のコミュニケーションの特徴を探るため、回避性を含む3つの視点で、日本人が同文化のストレンジャーと異文化のストレンジャーに対する時の比較を行った。筆者は日本人が同文化のストレンジャーより、異文化のストレンジャーに対して高い不安性、不確実性、回避性を持ち、かつそれらの高低の傾向は同文化と異文化のストレンジャーに対して同じであるという仮説を立てた。調査結果は、日本人が不確実性については異文化のストレンジャーに対して高いという仮説と、不安性、不確実性、コミュニケーションを始めた後の回避性については同文化と異文化のストレンジャーに対して同じ高低の傾向があるという仮説を支持した。

以上の結果より筆者は、ストレンジャーの文化的背景は、日本人の不確実性に影響を及ぼすが、不安性や回避性に影響を及ぼさないという事を主張した。

筆者はさらに文化環境の違いが、日本人のコミュニケーションに与える影響を検討するため、ドイツに短期の語学留学を行う学生に対して、出発前（日本と言う文化環境）とドイツ留学中（ドイツと言う文化環境）に調査を行った。筆者は文化環境の違いに関係なく、日本人は同文化のストレンジャーより、異文化のストレンジャーに対して高い不安性、不確実性、回避性を持ち、かつそれぞれの不安性、不確実性、回避性は日本と言う文化環境よりドイツという文化環境で高いという仮説を立てた。結果は、ドイツにおいて日本人が不安性について異文化のストレンジャーに対して高いという仮説と、日本において日本人が不確実性について異文化のストレンジャーに対して高いという仮説のみが支持された。

この結果より筆者は、コミュニケーションが行われる文化環境は日本人のストレンジャーに対する不安性と不確実性に影響を及ぼすが、回避性には影響を及ぼさない事と、日本人の異文化のストレンジャーとの不安性は、日本という文化環境よりドイツの文化環境の方が高まり、不確実性は低下するという事を主張した。

筆者はこれらの検討の結果を総合して、個人と環境の文化の違いがコミュニケーションに影響を与え、この両方を考慮しながら異文化間の適応を考えて行く必要があるという結論を導いている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

文化とコミュニケーションは密接に関係しており、文化はコミュニケーションであり、コミュニケーションは文化であるという主張もある程である。そのため、文化的背景を理解しない外国人にとって、日本人とコミュニケーションを行うことは困難である。

筆者は外国人留学生という立場から、外国人留学生の日本への適応という問題に取り組み、文化的背景の差異に伴うコミュニケーションの問題が重要であるという事にたどり着いた。そして、コミュニケーションについての先行研究を調べた結果、Gudykunstらの主張するAUM理論に注目し、その詳細について検討した。

AUM理論では、コミュニケーションは、不安性と不確実性という二つの側面から成り立つと考えられている。AUM理論はこれまで、ストレンジャーと友人とのコミュニケーションにおける不安性と不確実性の比較や、文化環境の違い（アメリカ合衆国と日本）における同様の比較などについての研究に適用され、不安性と不確実性の高低がコミュニケーションの実現に大きな影響を与えることや、それらが親密度が変わることによって変化すること、さらに文化環境の違いが影響することなど、コミュニケーションに関する多くの知見を与えて来た。

筆者はこの理論の妥当性が高いと考え、さらにストレンジャーとのコミュニケーションを研究する際には不安性（感情）、不確実性（認知）に加えて、回避性（行動）を考慮すべき事を提案した。この点は、本論文の新規な所であり、評価の対象とできる部分である。筆者はストレンジャーとのコミュニケーションにおける回避性について考察し、そのような回避性にはコミュニケーションを始める前の回避性と、コミュニケーションを始めた後の回避性がある事を明らかにした。そして、その評価を行う質問を設定し、不安性と不確実性を求める質問とあわせて調査を行った。調査項目のスケーリングに関する問題や、不安性と不確実性の質問をアメリカ人のために作成された Gudykunst らのものをそのまま使うという問題を残しているが、回避性に関する新たな調査法を考案した事は、一定の評価が与えられると考える。一般的には、コミュニケーションの回避性は、不安性と不確実性が高い場合に起るものであり、必然的に不安性と不確実性の関数として与えられるものであると考えられる。しかしながら本論文では、後述する様に日本人のコミュニケーションにおける回避性は必ずしも一定の傾向を示さない場合があることを明らかにしている。これは、ストレンジャーとのコミュニケーションを考える上で、重要なデータを与えるものであり、回避性という視点がコミュニケーション研究に新たな知見を与える可能性があることを示唆するものである。

筆者は、この回避性を含めた調査を、日本人が行う同文化と異文化のストレンジャーとのコミュニケーションの差異を明らかにするのに適用している。Gudykunst らの研究では、同じ文化のストレンジャーと友人のように、親密度の異なる同文化の人とのコミュニケーションの違いに注目していた。このように同文化と異文化のストレンジャーとの比較を行う事は、これまで余り行われておらず、外国人に対する適応を前提とした日本人のコミュニケーションを考える上で重要な視点であると評価できる。調査結果は、不確実性が同文化より異文化のストレンジャーに対して高く、不安性と回避性は変わらなかった。この結果は、日本人が外国人に対する知識的な欠如がコミュニケーションのバリアになっている事を示唆するもので、興味深いものである。また、不確実性と不安性との間で相関が無いという結果が得られた。これは先行研究の結果と異なり、それについて筆者はこの結果の妥当性を主張しているが、今後のさらなる検討が必要であろう。

筆者はさらに、日本人が行う同文化と異文化のストレンジャーとのコミュニケーションの差異に関する研究を、文化環境に着目して展開させている。すなわち、日本人が日本という文化環境とドイツという文化環境に置かれた時、同文化と異文化のストレンジャーとのコミュニケーションの違いが現れてくるかという調査である。これまでの研究は、日本人が日本で行うコミュニケーションやアメリカ人がアメリカで行うコミュニケーションについてのものであり、文化環境の変化に伴うコミュニケーションの変化についての研究は余り見られない。この点も、日本人のコミュニケーションを考える上での新しい視点を与えるもので、評価できる。調査の結果は、文化環境の違いが不確実性に影響を与え、ドイツという文化環境にある方が、同文化のストレンジャーにも異文化のストレンジャーにも、そのバリアが低下するというものであった。この結果は、異文化環境の中に出て行こうとする日本人のコミュニケーションを考える上で有用な知見を与える。残念ながら、調査対象者が少数しか得られず、その妥当性については議論の余地があるが、興味あるデータではある。

以上のように、本論文は回避性の導入、同文化と異文化のストレンジャーの比較、異なる文化環境における比較という、コミュニケーション研究の新たな視点を複数導入し、これまでに無いストレンジャーとのコミュニケーションに関する知見を与えている。これらの知見は、ある文化の人間が異なる文化環境に適応し、その文化の人々と円滑にコミュニケーションを行うのに役立つものである。その意味で、データの扱い等の詳細な点の問題は残しているが、異文化コミュニケーション研究の新しい側面を切り開くものとして、高く評価できる。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。